

平成二十一年七月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八三四号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十一年七月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

若葉雨人のあとゆくこころあり

子燕の風知りそめし頭かな

竹皮を脱ぎて月の出近かりし

水無月の磧にタカラジエンヌかな

大寺も前の飯屋も梅雨最中

厭はるる人もどりゐる青田かな

大夏木のもと僧の子の三輪車

夏草のそよぎに月の痩せてゐし

水見つつ羅怖きこと言へり

炎天を来たる頬骨張りてゐし

太白星

柳生千枝子

大切に叔母よりの古茶出してみる
松蟬の声にひたりてこころよし
松蟬の声にリズムのあるやなし
松蟬の声ひろごれる天明るし
松蟬のシャンシャンひびく脳の中
我に尚若さのこるか松の芯
美しき記憶のありぬ松の花

杉浦典子

謡本の父の書き込み亀鳴けり
鋏の柄に握りぐせあり山ざくら

豆の花舟屋の戸づつに畑
花月夜母亡き家を通り過ぐ
赤げらの飛びたちてよりのどかな木
囀のなかにゐて耳衰ふる
春疾風えべつさん筋海に尽き

浜口高子

回廊の木目蹠に初ざくら
つむじあと胡葱の列太りたる
虫出しの野づらを渡る駐屯地
亡夫に声かけてもみたり目借時
花の昼新聞全紙流れゆく
酒蔵を曲り酒蔵初つばめ
春雷やゆらと豆腐の浮いてきし

火星作品

山尾玉藻選

春の鶯浮棧橋の揺れにあり
八幡 大山文子
独活小屋を覗きぬる背の日当れる
若葉風震災前の地図持つて
噴き上ぐる糠の匂ひや松の芯
明石 戸栗末廣
給油所にお玉杓子の水もらふ
蛸蚪の国大きな雲のとぶ日かな
榧の枝の風にかけたる蛇の衣
蛤を焼く年寄に春の月
花冷や駅の金魚の横顔も
皆去にし後の涅槃図仰ぎけり
高松 涼野海音
涅槃図のひとりは大樹抱き突ける
まだ何も置かぬテーブル朝桜

会ひしことなき人待てる桜かな
花散るやひろき額の男の子
雨の来さうな赤貝の肋かな
初ざくら嬰の頭を荒撫です
山祇の闇のつづきの大櫻
花鳥の花を散らしてそれつきり
年寄に年寄の朋初諸子
糠煮ゆる匂ひに春の蠅生まる
狛男ゆく雉の尾羽根つちに触れ
塵となり掃く花びらの逃げやすし
苗代寒犬嗅ぐ水のさざなみす
紋付を吊す古着屋花の昼
対岸を婦警の歩く花ぐもり
金丸座の木戸くぐりけり春の闇
百ふふみ百咲きそめし藪椿
長閑けしや城を出できし人力車
酔ふほどでなき手を引かる夜の桜

神戸
深澤
鱻

宝塚
山本
耀子

藤井寺
戸田
春月

選のあとに

山尾 玉藻

いたらしい。殆ど面識のない仲間たちを待つ心中は、少々緊張と昂ぶりで揺れていたことだろう。一字一字に無駄がなく、眩しいような初々しさを湛える一句である。「桜」がその初々しさを称えているかのようで、断じて「桜」の一句である。

独活小屋を覗きみる背の日当れる

大山 文字

年寄に年寄の朋初諸子

深澤 鱧

陽光と外気を遮断する「独活小屋」の中は昼も暗い。小屋を覗きこむ人物は目を凝らして中の様子を窺うのに夢中で、その背中はさぞ無防備であったことだろう。好奇心旺盛な作者がこんな絶好のシャッターチャンスを見逃す筈がない。況して、その背中には日が当たっているのである。何ともはやぬかりある背中であることよ、と作者の吹きが聞えるようだ。

給油所にお玉杓子の水もらふ

戸栗 末廣

お孫さんとドライブの途中、池か水田で「お玉杓子」を掬われたのであろう。帰路立ち寄ったガソリンスタンドで、「お玉杓子」の為の水を少し貰ったのである。「給油所」と「お玉杓子」という思いがけぬ取り合わせが今どきの旨みをほのぼのと伝えていて、単なる此事に終っていない。

会ひしことなき人待てる桜かな

涼野 海音

春の洛中吟行は真如堂の境内集合で始まった。高松から初参加の作者は前日に京都入りし、当日は境内に一番乗りして

句意は平明ながら渋い温雅さを湛える一句である。無論季語「初諸子」が程よい品位を生んでいるのであるが、文字の構成や字くばりが落ちついた印象を与えるからである。因みに、「年寄」を「老人」に「朋」を「友」に置き換えてみると、自ずと趣が希薄となる。加えて、中七までのどの母音のひびきが快く、口誦性にも富んでいる点にも注目したい。

塵となり掃く花びらの逃げやすし

山本 耀子

花びらの散り込む部屋に赤ん坊

河崎 尚子

「花びら」は微かな風にも応えて舞い、受け止めようとする掌から上手く反れてゆく。まるで「花びら」に感情や意志があるように思えてくる。

一句目、掃き寄せようとすればするほど、「花びら」は箒の先へ先へと漂っていく。「逃げやすし」と感じる作者もまた、「花びら」にこころを感じたのであろう。「花の屑」「花の塵」となっても「花びら」に違いはない。

恒星圈

金澤明子

花びらのこぼると見え蝶離る
春嵐鏡裡の己が瞳にしばらる
藤くぐり柔かきパン買ひて出る
さくら蕊吹き寄する風犬に吹く
春惜む茶菓子に刷ける薄緑

河崎尚子

あれからは誰にも会はず山すみれ
杖に幹凭せ桜の咲き満ちる
えべつさんに釣つてもらひぬ春愁
胸高に緑の袴入学す
平行に川面をのぼる初燕

小林成子

さくら咲くこの頃多き物忘れ
朝日うけ庭を彩る花蘇枋
人波に押されて花の通り抜け
山火事のひろがりぬたる春の闇
花屑を踏みて見上ぐる石舞台

非番なるひとと見上ぐる山桜
剥製の雉子に待たさる花の冷
さへづりへ一步踏み入る城下かな
蛸葉師堂に鐘つく花衣
卯の花腐し松葉真直ぐに浮いてをり

坂口夫佐子

巴塚へさしかけてぬし春日傘
風出でて岩に影する雪柳
立ちあがりさうな櫛の芽箆いつぱい
裏山の墓地の好きなる春の猫
春昼の亀の手足の泳ぎけり

獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

天谷翔子

根本ひろ子

讃岐富士真正面の涅槃寺
クロークに遍路笠あり金丸座
重箱に水を満たせば浮く花びら
馬の子の遊べる岬より晴るる

垣岡暎子

笠置早苗

湧水が小石噴き上ぐみどりの日
木の芽風人魚の乳房空に向き
纏れぬて纏れてをらず蝌蚪の紐
壁を打つテニスボールや春夕焼

松山直美

白数康弘

涅槃図に躍り寄りたる皮ジャケツ
夜桜のもどりコロッケ買ひにけり
水音の十六羅漢かげろへり
初つばめ極楽橋の真中にて

三本の縄に涅槃図吊られある
涅槃図を師の肩越しに拝しけり
涅槃図の嘆きの眼われを見ず
草の芽へ歩んでゐたるフラミンゴ
浅沓の乾きたる音花は葉に
花大根金剛山より雨の来る
姉の忌や春たけのこをうす味に
薫風や大和に多き切り通し
子雀の巢よりこぼれし着地なる
いろいろな鳥の羽搏き春深し
風ときて畳に散りしさくらかな
朧夜を走る自転車魚のやう
郭公や牛の大きなやさしき眼
山羊の糞 緬羊の糞 夏旺ん
溽暑なり元気な牛の長尿り
寝そべつてをりし牛なり日の盛